

「……今、侵入、って言いました？」

「ああ、言い方が悪かったね。こっそり潜り込んでみようって言いたかったんだ」

「私には同じ意味に聞こえるんですけど」

「ほら耳を澄ませてごらん。あの賑わいっぷりを。きっと中では盛大なパーティーが行われているに違いないさ」

私の突っ込みは華麗にスルーされた。チャーリーさんには、鹿鳴館の華やかなあかりしか見えていないようだ。

「僕の推理ではね、すんごいごちそうが用意されているとみているんだ。ステーキとかローストビーフとかフとか寿司とか北京ダックとか」

「ステーキ……ローストビーフ……」

豪華なメニューの数々が、さつきから空腹を訴える私の脳裏に横切った。そりゃあもちろん、食べられるものなら食べたい。でも――。

「む、無理。こっそり潜り込むなんて……！」

「ははっ、僕を誰だと思ってる？」

チャーリーさんは不敵に口角を上げた。

「世紀の大奇術師・チャーリー様に不可能なことなど、ほとんどないのだよ」

「……ほとんどない、ですか」

はつきり『ない』と断言しないところが微妙だ。

……かくして私は、チャーリーさんに強引に引っ張られるようにして鹿鳴館の玄関へとやって来た。

「あの、チャーリーさん。警備員っぽい人がいますけど？」

玄関扉の両脇には、時代がかった軍服姿の男の人が2人立っている。見るからにコワモテで、なんだか物々しい雰囲気だ。どんなパーティーなのか知らないけど、お金も招待状もないなら門前払いを食らうに決まっている。

「なあに、心配することはないよ。正面玄関さえ突破してしまえばこっちのものだからね」

「でも、どうやって？」

「こうするのさ。ちよつと失礼」

また例によって、チャーリーさんは指をぱちんと鳴らし、大きなマントを取り出した。そのマントをふわりと羽織ったかと思うと、ぐいと私を抱き寄せる。

「わっ！」

「これは世にも不思議な魔法のマントでね。ひとたびまたとえば存在が消え、背景と同化してしまうという便利アイテムなんだ」

「はい??？」

「今、僕らの姿は誰も目視できない。つまり透明人間になったも同然なんだよ。ははっ、便利だろう？」

(またよくわかんないことを言い出した……)

けれど、マントで包み込むように抱きかかえられてしまった私は逃げることもできない。

「あ、あの、やっぱり、もう帰りたいたいんだけど……」

「いやあ、楽しみだなあ、豪華な料理。やっぱりごちそうといえばステーキだよねえ……」

「お願い、帰らせて！」

私はマントの中でじたばたともがいた。帰る場所なんてわからないけど、ここからいち早く立ち去りたい。

(……あれ?)

やがて私の耳に、優雅な音楽が流れ込んできた。曲名はわからないけど、聞き覚えのある有名なクラシックだ。その旋律に乗って聞こえてくるのは、女の人たちの弾んだ笑い声。鳥のさえずりのようなおしゃべり。かちやかちやとお皿を運ぶ音。誰かの咳払い。楽しそうな乾杯の声——。マントの中からでも、周囲を取り巻く熱気が伝わってくるようだった。

「はい、お疲れ様。もう出てきていいよ」

ひらりとマントのしがらみが解かれ、唐突に視界が開けた。まばゆい光が瞳に降り注ぎ、私は思わず手をかざす。

(まぶしい……)

高い天井からぶら下がる、大きな大きなシャンデリア。カットガラスの光が反射するその下に、豪華なダンスホールがあった。

そこではお尻のあたりがふくらんだデザインドレスに身を包む女性たちが、優雅なステップを踏んでいる。彼女たちをエスコートするのは、胸にたくさんの勲章をつけた軍服姿の男性だ。中には燕尾服を着た外国人も混ざって、フロア全体がえもいわれぬ異国情緒を醸し出していた。

——いつのまに、警備員の目をすり抜けて鹿鳴館の中へと入り込んでいたのか。私は啞然としなが

ら、隣で薄笑いを浮かべる奇術師を見上げた。

「そのマント、ほんとに透明になるの？」

「はは、そんなわけないさ」

彼はあっさりと言い放ち、肩をすくめる。

「え？ だって、さつき……魔法のマントって言ったじゃない」

「僕は魔法使いじゃなくて、ただの奇術師だ。この程度のマジック、奇術師レベル3ぐらいで習得する簡単スキルだよ」

「そうなの……？」

「ちなみに僕は奇術師レベル75だけどね」

「……」

どこまでが冗談でどこまでが本気なのか、さっぱりわからない。そんな私の肩に、ドンツと誰かが勢いよくぶつかってきた。

「っ！」

ぶつかった弾みでよろけた私を、たくましい腕ががしりと受け止める。

「ああ、すまなかった。大丈夫かい？」

「は、はい」

私に手を差し伸べてくれたのは、白い軍服姿の男の人だった。軍服には金糸の細やかな刺繍が施され、肩には金の肩章が揺れている。見るからに階級の高そうな人が着る衣裳だ。

(ずいぶん気合いの入ったコスプレだなあ)

でも、これがまたよく似合っている。整った美しい顔立ち。シャンパンゴールドの光を受けたその瞳は、自信に満ち溢れ、輝いていた。

「本当に大丈夫かい？ 怪我は？」

「はい、本当に大丈夫です」

「そうかい？ ならいいのだが……」

「？」

彼は腕を組み、なにやら興味深げに私の全身をじっくりと眺めている。あまりに遠慮のない視線に、私はたちまち居心地が悪くなった。そういえば、さつき男の人に道を聞いた時も、同じようにしげしげと観察されたことを思い出した。高校の制服なんて、たいしてめずらしくもないだろうに。

「あの、私になにか……」

「鷗外さん、なにしてるんですか」

その時、私の背後から誰かの声があった。

「勝手にいなくならないでください。こんなところで放置されても困ります」

「ああすまない、春草」

シユンソウ、と呼ばれた学生服の男性は、冷やかな目で軍服姿の彼に歩み寄った。

（これもコスプレ……？）

いまどき見ないタイプの学生帽に、これまたレトロなシルエットの詰め襟。長い髪を一つにゆるく束ね、どこか不機嫌そうに薄い唇を引き結んでいる。

「そう険しい顔をするんじゃない。なにか絵の題材になるような物はあったのかい？」

「ここは空気が悪すぎます。目が痛くて絵の題材を探すどころではありません」

「おや、そいつは残念だ。たまには俗物に触れてみるのもいいと思ったのだけどね。醜悪しゅうあくな要素も芸術には必要だろう？」

「……また貴方は、公衆の場でそんな問題発言を……」

そうぼやきながら、詰襟の青年はゆっくりと私のほうを向いた。

「……このご婦人は？」

「うん、今、知り合ったばかりなのだよ。ちようどお茶にでも誘おうと思ったところで、おまえという邪魔が入ったというわけだ」

(……え？ そうなの??)

軍服の彼がにやにやとしている一方で、学生服の彼のまなざしはますます冷ややかなものになっていく。

「……鷗外さん。貴方は相変わらず、前衛的なものをお好みのようですね」と、ぼやく彼の視線は、まっすぐに私へと注がれている。

「もう今夜は十分油を売りましたよね。長居は無用です。さっさと帰りましょう」

「こら、待たないか春草。まったく、おまえという奴は……」

軍服姿の男の人は、春草と呼ばれていた青年を追いかけて、人混みの向こうへと消えて行ってしまった。

「やあ、いきなり有名人とご対面だね」

いつのまにかステーキの皿を手にしていたチャーリーさんが言う。

でも、これがまたよく似合っている。整った美しい顔立ち。シャンパンゴールドの光を受けたその瞳は、自信に満ち溢れ、輝いていた。

「本当に大丈夫かい？ 怪我は？」

「はい、本当に大丈夫です」

「そうかい？ ならいいのだが……」

「？」

彼は腕を組み、なにやら興味深げに私の全身をじっくりと眺めている。あまりに遠慮のない視線に、私はたちまち居心地が悪くなった。そういえば、さつき男の人に道を聞いた時も、同じようにしげしげと観察されたことを思い出した。高校の制服なんて、たいしてめずらしくもないだろうに。

「あの、私になにか……」

「鷗外さん、なにしてるんですか」

その時、私の背後から誰かの声があった。

「勝手にいなくならないでください。こんなところで放置されても困ります」

「ああすまない、春草」

シユンソウ、と呼ばれた学生服の男性は、冷ややかな目で軍服姿の彼に歩み寄った。

（これもコスプレ……？）

いまどき見ないタイプの学生帽に、これまたレトロなシルエットの詰め襟。長い髪を一つにゆるく束ね、どこか不機嫌そうに薄い唇を引き結んでいる。

「そう険しい顔をするんじゃない。なにか絵の題材になるような物はあったのかい？」

「ここは空気が悪すぎます。目が痛くて絵の題材を探すどころではありません」

「おや、そいつは残念だ。たまには俗物に触れてみるのもいいと思ったのだけどね。醜悪しゅうあくな要素も芸術には必要だろう?」

「……また貴方は、公衆の場でそんな問題発言を……」

そうぼやきながら、詰襟の青年はゆっくりと私のほうを向いた。

「……このご婦人は?」

「うん、今、知り合ったばかりなのだよ。ちようどお茶にでも誘おうと思ったところで、おまえという邪魔が入ったというわけだ」

(……え? そうなの??)

軍服の彼がにやにやとしている一方で、学生服の彼のまなざしはますます冷ややかなものになっていく。

「……鷗外さん。貴方は相変わらず、前衛的なものをお好みのようですね」と、ぼやく彼の視線は、まっすぐに私へと注がれている。

「もう今夜は十分油を売りましたよね。長居は無用です。さっさと帰りましょう」

「こら、待たないか春草。まったく、おまえという奴は……」

軍服姿の男の人は、春草と呼ばれていた青年を追いかけて、人混みの向こうへと消えて行ってしまった。

「やあ、いきなり有名人とご対面だね」

いつのまにかステーキの皿を手にしていたチャーリーさんが言う。

「有名人？」

「そう、今のはもりりんたろう 森林太郎……というより、もりおうがい 森鷗外と言ったほうがわかりやすいかな。そして彼と一緒にいたのは日本画家のひしだしゅんそう 菱田春草だよ。名前は聞いたことあるだろうか？」

その時の私ときたら、かなり間抜けな顔をしていたに違いない。

(森鷗外？ 菱田春草？)

名前は聞いたことがあるけれども、だ。それこそこの鹿鳴館と同じで、教科書に名前を連ねているような人たちなわけで。

(チャーリーさん、なに言ってるんだろ)

私は汗ばむ手を握りしめた。足元からじわじわと不安が押し寄せてくる。そんな私に追い打ちをかけるように、チャーリーさんは、『ほら、見てごらん』とおもしろそうに指をさす。

「今夜のパーティーはすごい顔ぶれを揃そろえているようだね。あそこにいる学生服の彼は、幻想作家のいずみきょうか 泉鏡花だ」

チャーリーさんの指さした方向を見て、私はぎよっと目を見開いた。着飾った人々の中に、学生服姿の細身の男性が1人――。その細い肩には、なぜか大きな白ウサギがちよこんと乗っかっていた。

(……なにあれ。ぬいぐるみ？ それとも本物？)

よくよく見ると耳が動いている。どうやら本物のウサギらしい。ペットを連れてパーティーに参加するとは、なんて斬ざん新しんな人なんだろう。

「はあ……不衛生だな。こんなところでよく食事ができるよね、どいつもこいつも……」

その美しい顔立ちに不似合いな、乱暴な言葉が彼の口から飛び出た。

「パーティーなんて雑菌の温床でしかないよ。だから来たくなかったんだ……」

「おや？ 鏡花ちゃんじゃねえか」

ぶつくさと独りごちているウサギの彼に声をかけたのは、ピンストライプのスーツを着た男の人だった。

（わ……すごい美形）

ウサギの彼もかなりの美形だけど、今現れた彼はそこにいるだけで場が華やぐような、人の目を惹きつける容姿をしている。すらりとした身体つきといい、どこか色気のあるまなざしといい、通行人がつい二度見してしまうほど目立っていた。

「なーんだ、川上か」

「なんだなんだ、冷てえじゃねえか。おまえの唯一の友人と、こうして相まみえたっていうのによ」

「はあ？ 僕をちゃんづけで呼ぶような奴、友人にした覚えはないよっ」

ウサギの彼がギロリと睨みつける。けれどスーツの彼は意に介したふうでもなく、愉快そうに笑いをこらえている。

「……あら、笑った顔もステキだわ！ ってところかな？」

「なっ……！」

突然耳元で囁かれ、私は驚きのあまり飛び上がった。

「うんうん、見とれるのも無理はないよ。彼は川上音二郎かわかみおとじろうといってね。新進気鋭しんしんきえいの若手役者なのさ」

「べ、別に見とれてたわけじゃ」

……ないわけではなかった。本当は。でも役者と言われて納得した。どうりでオーラが華やかな

ずだ。

(それにしても……)

「チャーリーさん、どうしてそんなに詳しいんですか？」

彼らとは知り合いでもなさそうなのに、次々と人名を言い当てていくのが不思議でならない。

するとチャーリーさんは、口いっぱいにほおばったステーキをぐくりと呑み込んでから、

「うん、それはね。この時代に来たのはこれが初めてじゃないからだよ」

「はい？」

謎めいた返答に、しばし私の思考が固まる。

「この時代って……この時代ですよね」

「そう、この時代。つまり明治時代だね」

「いえ、今は平成ですけど」

「つい数時間前まではね。でも僕らは今、明治時代にタイムスリップしてしまったわけだからさ」

——タイムスリップ。そんな非現実的な単語を、この奇天烈きてれつな男はいともしやく口にす。

「……って、さつき説明しなかったっけ？」

「したかもしれませんが、けど」

でも、さすがの私もこの状況をテーマパークのひと言で片づけるわけにはいかないような気がしていた。丸の内の一等地にビルが1つもないのも、道行く人がみんなレトロな装いなのも、すべてが不自然すぎる。

(私は夢を見ているの?)

でも夢だとしたら、なにもかもがリアルすぎる夢。じゃあ、この世界が夢ではないとしたら――。

(……ここは死後の世界、とか?)

我ながら突拍子もない発想だけど、それならいろいろと納得がいく。もしかすると私は、事故にあつて死んでしまったのかもしれない。つまりこの世界は黄泉よみの国。ダンスフロアにいる全員が、私と同じく死んだ人……とか。それなら明治どころか江戸や平安時代を生きた人々がたくさんいたとしても不思議じゃない。

(……いやいやいや)

思考がオカルトな方向に流れ着きそうになり、私は慌ててかぶりを振った。

「どうしたの? おばけでも見たような顔しちゃって」

「……シヤレにならないこと言わないで」

私は力強く訴えた。おばけなんていたら困るし、ましてや自分がおばけになったらもっと困る。

「え? ホントにおばけがいたのかい? どこどこ!」

「おばけなんかいません!」

そう声を荒げた私の目の前に、いきなり大きな人影が立ちはだかった。

「ちよつと待ってください、そこの娘サン」

あさつての方向から乱入してきた眼鏡の外国人は、真剣な様子で私を見下ろした。

「貴女は今、おばけなどいない、とおっしゃいましたね……?」

「は、はあ」

「失礼。私はこういう者です」

呆気あっけに取られている私に、彼は一枚の名刺を差し出し出してきた。そこには『東京帝國大学文科大學英文科講師 ラフカディオ・ハーン』と書いてある。

——ラフカディオ・ハーン？ やっぱり聞いたことのある名前だ。たしか『小泉八雲こいずみやくも』の本名だったような……。

「おぼけはいない、そう断言するのは実にたやすいことです」

彼は眼鏡のフレームを軽く持ち上げてから、こほんと咳払いをした。

「しかし、私がかつて出雲いずもにいた頃……いえその前に、加賀かかの潜戸くけどに出向いた時の話をしましょう。そこには地蔵の泉と呼ばれる、死んだ子供の亡霊が飲むお乳の泉があり……」

(え？ ええ？)

「……その岩屋の奥には青白い石地蔵が微笑んでいます。さらによく見ると長さ10センチほどの小さな足跡があるではありませんか。これは夜の間に子供の亡霊たちがつけた足跡であり……」

(なんで？ なんで急に怪談が始まってるの？)

戸惑う私とは対照的に、彼は訥々とつとつと語る姿勢を崩さない。

(困ったなあ……)

私はチャーリーさんに助けを求めようとした。隣でステーキを食べているはずの、彼に。

……でも、さらに困ったことに、チャーリーさんはどこにもいない。たった今、2秒前までは隣にいたというのに。

(きつとまた、料理でも取りにいったんだ……)

ずるい。そういえば私はまだ、牛肉らしい牛肉をひと口も食べていなかった。